【授業科目】健康社会要因論　　Social determinants of health

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
田中 武士	１年次 後　期	必　修	２	３０	講　義	／	／	可

授業概要（内容と進め方）及び課題に対するﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	授業概要／私たちが生きる社会は自身の健康に大きな影響を与えています。「所得の格差」が「命の格差」にもつながる健康格差の実態、健康格差発生のメカニズム、健康格差への対策について社会疫学等による知見から概説します。将来、医療者として働くために必要な「聴く」「まとめる」「伝える」「考える」力を育むために、講義では視聴覚教材や新聞記事を用い実例を交えながら健康とは何か、人権が保障される社会はいかにあるべきかを考え、小レポート作成も取り入れながら進めていきます。 課題に対するﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法／提出された課題等については全体の総評コメントを授業時間内に公開します。
授業の位置づけ	本学のディプリロマ・ポリシー②「人間の健康を環境との関係において捉え、地域社会の生活者の視点から看護の役割を考え、実践することができる。」の達成に寄与している。
到達目標（履修者が到達すべき目標）	①健康と社会の関係について広い視野から理解することができる。 ②自分が特に関心のあるテーマについて文献などから情報収集を行い、自身の考えを深め、表現することができる。 ③現代社会における人々の暮らしの実態から健康に関係する社会のあり方について考えることができる。
時間外学習に必要な内容・時間	・下記の授業計画を参考に教科書を事前に読み（３０分程度）、わからない用語などは適宜調べておくと授業内容が理解しやすい。 ・日頃から興味ある新聞の記事等に目を通し社会情勢について触れておくと授業の理解にも役立つ。 ・定期試験は講義の内容をもとに筆記試験を行う。教科書や講義の際の配布資料をしっかり読んで理解しておくこと。下欄の参考書も学習に用いるとさらに理解が深めることができる。 ※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してある。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位１５回科目の場合：予習+復習４時間／１回）（１単位１５回科目の場合：予習+復習１時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。
授業計画	第１回　イントロダクション 第２回　健康格差の実態を知る①「小児期」 第３回　健康格差の実態を知る②「成人期」 第４回　健康格差の実態を知る③「高齢期」 第５回　健康格差社会－何が心と健康を蝕むのか 第６回　健康・疾病観と保健・医療 第７回　生物・医学モデルから生物・心理・社会モデルへ 第８回　「貧困」とは何か 第９回　人権としての社会保障を考える 第１０回 社会と健康をつなぐもの 第１１回 社会のありようと健康 第１２回 ソーシャルキャピタル 第１３回 健康なまちづくり 第１４回 社会と健康をめぐる課題 第１５回 まとめ（わたしたちに何ができるのか） ※受講生の学習状況を見ながら適宜内容を変更することがある。 全て 田中
評価方法 評価基準	小テスト４０％（２回）、定期試験６０％で総合的に評価する。
教科書	近藤克則（２０２２年）『健康格差社会－何が心と健康を蝕むのか　第２版』医学書院
参考書等	・栗林寛之監訳、マイケル・マーモット（２０１７）『健康格差－不平等な世界への挑戦』日本評論社. ・武田裕子編（２０２１年）『格差時代の医療と社会的処方 病院の入り口に立てない人々を支えるSDH(健康の社会的決定要因)の視点』日本看護協会出版会 ・近藤克則（２０１７年）『健康格差社会への処方箋』医学書院 ・イチロー・カワチ（２０１３年）『命の格差は止められるか』小学館 ・NHKスペシャル取材班（２０１７年）『健康格差－あなたの寿命は社会が決める』　講談社
学生への助言等	健康管理は自己責任だと言われがちです。しかしそれは本当なのでしょうか。健康のありようは個人の力だけではどうすることもできない社会のさまざまな要因によって影響を受けています。そしてそれは命の格差を生むことさえあります。医療者としてこの事実を無視することはできません。この講義を通じて広い視野と関心をもち、人々の命と健康、そして私たちが生きる社会のあり方について考えていきましょう。 ※私語や授業と関係のないパソコン、スマートフォン操作等、授業を妨げる言動は厳禁。単位取得は容易でないので受講登録にあたっては十分留意してください。受講生との対話も重視するため、主体的な姿勢での授業参加を求めます。